



## ◆其の九十四 郡夫の見た幕末の景色

江戸時代の終わり、新しい時代の幕開けを目前に日本各地は揺れていました。約270年続いた江戸幕府を中心とした旧幕府軍と、新しい時代を望む新政府軍の争いが激しくなり、やがて戊辰戦争(ぼしんせんそう)に発展しました。戊辰戦争といえば、薩長同盟や西郷隆盛、新選組などを思い浮かべ、どこか「ちくしの」とは縁のない話とを感じる人も多いのではないのでしょうか。

ところが、戦いと無縁なはずの「ちくしの」の農民たちが巻き込まれたことが分かる古文書が残されています。

江戸時代最後の年となった慶応4(1868)年2月、新政府軍から福岡藩へ兵を出すように命令が下りました。この時軍事物資を運搬するために従軍したのが、「郡夫(ぐんぶ)」「と呼ばれる人々で、本来は郡内で行う土木工事の際に集められる農民でした。「ちくしの」を含む御笠郡からは19人が集めら

れ、博多から船に乗って出発しました。

兵庫で船をおりた郡夫たちは、そこから陸地を北上するルートを通りました。途中京都では、有名な知恩院や清水寺を参詣し、華やかな祇園や遊郭に目をみはりました。大津では近江八景の三井寺、壮大な琵琶湖の景色など各地の観光地も回ったようです。しかし江戸・船橋で状況は厳しくなり、これまでは一転して、砲弾の飛び交うなかで物資を運ぶことになりました。

時に血の流れる戦の風景、時に色鮮やかな名所の風景を初めて目にした郡夫たちは、故郷に戻って新しい時代をたくましく生きたことでしょう。



郡夫たちが垣間見た光景  
(筑紫野市歴史博物館所蔵 錦絵)

問文化財課

